

E 7 住まいの適切な手入れに関する研究(第4報)
—大そうじの実態調査—
花王生活科学研 ○宮本歌子 佐藤孝逸 重弘文字

目的 近年、住宅や主婦のライフスタイルの変化に伴って、住まい方やそうじに関する意識、やり方なども変化していると思われる。そこで、今回は大そうじについて実態を明らかにし、適切な住まいの手入れについて考えるための現状把握を行った。

方法 首都圏30km圏内の20~59歳の主婦に対して、大そうじの実態や大そうじに対する意識などを、ふだんのそうじと比較して調査した。調査方法は往復郵送法自記式。調査時期は1988.1月末~2月初旬。調査対象は600名(有効回収数432名)。

結果 ①年末の大そうじを行う人は9割近くおり、また5~8月にかけても大そうじをする人が約4割見られた。②年末の大そうじは12月中旬までに約半数の人がとりかかっているが、実施率が高いのは中旬以降であり、3~5日間要している人が多い。③大そうじの実施にあたっては約9割が事前に計画をたてており、その達成度も高い。④場所によって、ふだんと大そうじで手入れの仕方に特徴が見られ、ふだんも大そうじもよく手入れされる場所として玄関、ガスレンジなど、ふだん手入れされず大そうじで手入れされる場所として窓ガラス、換気扇などがあげられる。⑤家族の協力度が高い場所は、窓ガラスや照明器具や網戸などであり、これらはふだんのそうじ頻度が低く、かつ面倒なところである。⑥ふだんは掃いたり、水ぶきにとどまっている台所や部屋の床、壁も、大そうじでは洗剤の使用率が高くなり、念入りにそうじされている。⑦主婦は、大そうじを「新年を迎える準備として必要」(87%)と考えており、「ふだんそうじできていない場所を重点的に行う」(98%)、「家族に協力してほしい」(87%)という意識を持っている。